

	<p>2018年 5月15日 第126号</p> <p>発行：いたばし水と緑の会事務局</p> <p>年会費 2,000 円 郵便振替 00170-8-352508 いたばし水と緑の会 <a href="http://mizumidori2.eco.coocan.jp">http://mizumidori2.eco.coocan.jp</a> E-mail : <a href="mailto:mizumidori@nifty.com">mizumidori@nifty.com</a> 〒174-0063 板橋区前野町 5-31-7 瀬田方 tel&amp;fax3969-7124</p>
---	---

## 溜池辺に生えていたイヌシデの大木



2018年1月12日撮影

溜池のイヌシデ大木が伐られてしまった。根元から折れてしまう危険が出たためという。この写真では判らないが、池側に穴が開き（写真矢印）昔から抉れていた幹の山側と通じ、空洞が出来てしまった。木の上部はまだかなり重量がありそうなので、倒壊の危険性は素人にも判る。私の古い馴染みの木だが、残念ながらしょうがないようだ。

### 大木になったのはなぜ？

昭和30年代以前に撮影されたと推定される写真でも、この木は周りの雑木林の木にくらべ目立って大きい。なぜこの木だけが大きく育ったのであろうか。イヌシデという木は周りの雑木林に多いコナラやクヌギよりも生育が早く、より大木になる性質があるわけではない。武蔵野雑木林ではイヌシデはコナラと同様に普通に見られる木だが、特別に大きく育ったイヌシデを見た記憶は私にはない。このイヌシデには何か特殊な事情があったと想像される。

10数年前のことだが、溜池の近くに古くからお住いの沖田氏に、なぜこの木だけ大きくなったのですか、とお聞きしたことがある。何か謂れでもあるのかと期待したのだが、これという事情

は無いというのが氏の答えであった。イヌシデは燃やしてもおきにならず、何の役にも立たない木だと氏は説明してくれた。

植物名でイヌがつくのはイヌタデのように大体役立たずの種類である。役に立たないから伐られず、大きく育ったのかなどとボンヤリ考えたが、他所の雑木林で特別に大きく育ったイヌシデなど聞いたことがない。

ついでだがおきといっても、今の人には何なのか判らないかもしれない。コナラやクヌギを燃すとはじめは白い煙と炎をあげて燃えるが、しばらく経つと煙も炎もほとんど出さなくなり、炭を燃やした時のように赤く輝きだす。これがおきである。この状態になれば、室内の囲炉裏に移し、煮炊きや暖房に使える。私の世代は山登りの技術として焚き火を習った最後の世代であろう。木の種類により派手に燃えるがおきは出来ず、炊事には使えないもの（キャンプファイアには良さそうだが）、おきになり長くじっくり燃えるものがあると習った（皮などがはがれた流木などは見分けが難しい）。

### 溜池のイヌシデの記憶（写真は「写真は語る 総集編より」）



溜池の最初の記憶は昭和30年頃（小学1年生ぐらい）、池の南側の田んぼでオタマジャクシを捕ったことである。イヌシデ大木そのものの記憶は小学校低学年の頃のエビガニ（アメリカザリガニ）釣り結び付く。この大木の下が私の定位置だった。当時の溜池は満水時には大木の根元近くまで水であった。大木の山

側は根元から樋のように抉れており、途中まで簡単に登れ、下を見ると水面であった。

小学校高学年の頃、この木の根元に溜まった落ち葉を掻き出したらクロナガオサムシ（現在東京都区部では多分絶滅）が潜んでいた。オサムシに興味が出た頃で大変うれしかった（現存する板橋区産標本は多分これだけ）。

昭和40年代半ばの春、このイヌシデ大木にマヒワの大群が来た。昔の溜池の最後の姿の記憶はこの時のものである。翌年もマヒワの大群が来たが、すでに溜池は埋められていた。その後数十年間、私は赤塚溜池に行くことは無かった。（釣巻岳人）

## 身近な自然と私

# 緑の環境を残し守ることの大切さ

私が生まれたのは北区滝野川です。私には9歳年上の兄がいて、私が小学生の時、既に教育大学の理学部動物科の大学生でした。今思えば、明治時代に立てられた比較的大きな家屋の周りがあった庭には小さな築山があったりして、兄のお陰か、植樹された樹木もいろいろな樹種のものが植えられており、下草も引き抜かれることなく樹木の下にシダやユキノシタなどと共に生育していて、造られた庭というより、今から思うと野趣味のある庭となっていました。

私が草の間や地面を這っている虫たちに興味を持ち始めた最初の場面がそのような我が家の庭にありました。しかし、我が家の庭に親しむようになったのもつかの間、折からの第二次世界大戦の忌まわしい影響が我が家にも及ぶようになり、あるとき7発の焼夷弾に見舞われたりもし、ついに両親は私と妹それに祖母を、成増駅の近くの親戚の家に預けることにしました。当時9歳の私の新しい地での生活が始められるようになりました。

戦後、私たちは一家揃って現在の地（成増3丁目）に強制疎開で壊された木材を再利用して建てた家に引越しました。その家は貧しいものでしたが、敷地の面積は後で知りましたが、600坪もあって、その殆どが、マツ、クリ、コナラ、クヌギ、シデなどを中心とした山林でした。この松は当時練馬にあった軍の飛行場での防空壕の材料として強制撤収された残りの松が育っていたものでした。しかも、下草には、アズマネザサの間にキンラン、ギンラン、エビネ、フキ、カンゾウ、リンドウなどが生育していました。6月の初めになるとコジュケイが可愛らしい小さな雛を何匹もつれて家屋のそばに現れもしました。この家そのものにはあまりなじみませんでした。その周りの環境は十分に私の好奇心を満足させるものでした。コナラやクヌギにはカブトムシを初めノコギリクワガタ、コクワガタ、カナブン、アオカナブン、ヨツボシケシキスイ、時にオオスズメバチ、タテハチョウの仲間などが集まってきて賑やかでした。イチジクの木にはシラホシカミキリ、ゴマダラカミキリ、クワカミキリなどカミキリ類がよくやって来ていました。夏の林の中はクツムシ、ウマオイ、ツユムシ、ヤブキリなどが夏草に集まり、夜ともなれば虫たちの合唱で五月蠅いくらいでした。私は、電気もつけずに、鳴き声を頼りに少しずつ彼らに近づき両手でパチンと挟んで彼らを取るのが夏の夜の楽しみでした。今では少年時代のよき思い出ですが、これが殆どだったといっても良いくらいです。この他に思い出といえば、この山林の中に、一部畑にしていた所から収穫したサツマイモの貯蔵にと、作られた2mほどの縦穴がありました。結局使われずにそのままになっていましたが、冬が過ぎ春になって、そこを覗くのがまた、楽しみでした。穴の中にはどんなことが起きていたのでしょうか。初めて覗いたときは、本当にビックリしました。穴の中には、アオダイショウ、シマヘビ、ヤマカガシ、ヒキガエル、カナヘビ、トカゲ、昆虫では、オサムシ、各種ゴムシ、センチコガネ、マイマイカブリなど、またヤスデ、オオムカデなど多足類の仲間などがもやもやと動いていました。普通の人なら腰を抜かす所でしょう。兄と共に私は、この光景に心躍らせながら何時までも見つめていました。生物については、私は兄から多大な影響を受けたと思います。

この山林の傾斜地の下に小川が流れていました。この川は白子川につながっているとのことでしたが、この川に名前があるなどとは思ってもみませんでした。浅い川でしたので夏の午後など

によく妹などと川に入って水浴びを楽しみました。こんな幅1mほどの川にも数cmほどのフナ、モツゴやザリガニが見られることがありました。後年、都立高校の教員の職をやめて、「白子川と流域の水環境を良くする会」に入ったとき、この小さな川にも名があって、「百百向川」（ずずむきがわ）であることが分かりました。この川は、今で言えば成増の西友の下を流れ、川越街道から当時の陸軍の飛行場に続いて伸びて流れきているようでした。その頃の、のどかな風景も変われば変わるものだと思います。この様な風景や環境が子供の心にどれだけ将来の潜在的能力を与えるかと言うことは、経済性や近代化ということと比較できないくらい重要な問題です。

成増周辺にはまだまだこのような雑木林が残っていましたが、そのような所にはいなくても、私の採集したい昆虫はほぼ自分の所で得られると思える程、私は我が家の山林に魅力を感じていました。中学時代に、このような昆虫の4種類程を選んで、兄から進められた細字用の細いペンを用いて、ケント紙に20cm大の昆虫の細密画をスケッチし提出したものが、上野の美術館に張り出されました。

そのような少年時代の一つ一つの思いや様々な経験から受けて培われたものが基礎になって、私は、国立千葉大学の園芸学部に入り応用昆虫学を専攻に選んだのでした。

最近、素晴らしい宿場町として思っていた「白子宿」の湧水の量が目に見えて減ってきました。毎日旧川越街道に面している「魚久米」という魚屋さんの前を通って、埼玉から板橋に仕事で通っている方が、「この頃あのお店の前の桶に水が出ていないね。」と言われました。白子の町に出ている湧水が使われている家の水が、いろいろな所で止まっているのです。私たちのグループが調査している富沢医院の前の湧水地も崖線の上の土地は、いつの間にか幼稚園やマンションに急変してしまいました。樹木に覆われている崖の側面やその基部には、まだまだ湧水が流れ出ていますので、その崖地の保護を20年程前から会として和光市に実情を伝え、何とかできるように働きかけていました。同時に、地権者の方との話し合いも進めてきました。その思いが、次のような形になりました。

2016年、遂に樹木に覆われている崖線の山林が、和光市から「白子宿特別緑地保全地区」としての指定を受けることになりました。地権者の方にはその土地を売り出すなどすることなく、しっかりと保持して頂くことを守って頂くだけで、固定資産税の免税、相続税は8割の減免など、地権者に有利になるということで、大切な自然環境が守られることになりました。以前この会におられた坂本郁子さんの思いが今になってやっと実を結んだ、とこの会の責任者に教えて頂き、本当に感謝でした。この様なことがあり得るのです。当時、あまりにも若かった私にはこの様なことは望むべくもなかったのですが、私の家の山林もこの様になっていればと本当に悔やまれます。

近頃、散歩の折に気付きましたが、成鱒5丁目の以前タイヤ公園であった周辺で規模の大きな樹木の伐採が行われ、成増の風景はさらに変わっていきました。板橋区の情景が潤いのある地区となることを切実に願っています。

岩田 浩司



# トンボ池のようす

## オタマジャクシがいっぱいいたが

ここ数年、カエルの卵はオタマジャクシになる前にほとんど消えてしまいました。残った卵からかえったオタマジャクシも、日に日に数が減っていき、とうとう一匹も見当たらなくなってしまいました。カルガモが岸辺に集まったオタマジャクシをすくい取って食べていました。卵もカルガモが食べたのではないかと想像しました。いやタヌキが食べたのだという人もいます。卵はいかにも栄養たっぷりだから生きものにとってはごちそうです。暖かくなると食欲旺盛なザリガニがオタマジャクシを食べます。サギなどの水鳥たちも来るでしょう。弱者はどこで災難に遭うかわかりません。それが生き物達の世界なのですね。

今年春、余計なことをしていると思いながら、カエルの卵を笹の葉で隠したり、深みに移動させたりしてみました。今から思えば偶然でしょう、敵にも見つからず卵はほとんど全部オタマジャクシになりました。ザリガニの巣穴はあるのですが、まだザリガニは目立たず、たくさんのオタマジャクシが池のなかを泳いでいます。



写真を見て下さい。すごい数です。

「1000匹以上はいるよ。全部カエルになったら大変じゃないか」と言う人がいました。「オタマジャクシも小さなカエルも敵が多くて、大人のカエルになるのは、わずか数匹だそうですよ」、と答えましたが、心の中では、どこかに隠れて50匹くらいはカエルになって上陸できるだろうと確信していました。

# 何が起こったか

余裕ができて、私は赤塚公園に週に1, 2回出かけ、トンボ池も見ています。カエルの卵が全部オタマジャクシになって、ひとまず、第一の難関を突破しました。

池には、メスの野良猫がいつもいました。毎日エサをやりに来る人がいましたが、4月26日にエサをやりに来た人が声をかけても猫は現れず、池にはカルガモが2羽いました。

## カルガモが居着き、オタマジャクシはいなくなった

これまで猫がいたからカルガモは警戒して来なかったのかもしれませんが。人から餌をもらっているカルガモは人をおそれません。私がそばにいてもお構いなし。最初は池一面に泳いでいるオタマジャクシにはあまり執着せず、逆立ちしてお尻を上げてひたすら池底をあさっていました。池底に何かおいしいものがあるとも思えない。水草の芽?、春にいっぱい池に落ちて池底に沈んだイヌシデの花?、木の実?、もしかしてザリガニの子ども?。後から考えると(私の推理では)カエルの卵を探していたようです。透き通った水はカルガモが来てからすっかり濁ってしまいました。



やがて、逆立ちをやめて、オタマジャクシの追いかけです。右の池にいたオタマジャクシが左の池に逃げたり、奥の湿地に逃げたり、バラバラになって泳ぐオタマジャクシをカルガモもなかなかキャッチできないようでした。5月4日には、オタマジャクシの後足が少し生えてきました。逃げ切って早くカエルになってほしいとハラハラです。カモは土手や山側の浅いところに集まっているオタマジャクシを追い詰め盛んに食べています。追い込み漁です。それが終っ

たら水草の茂みにも分け入り、生き残りを探していました。5月9日、あれだけいたオタマジャクシは1匹も見当たりませんでした。2週間足らずで食い尽くされたこととなります。オタマジャクシは「気がついたらいなくなっていた」という印象ですが、カエルになれずに食べられてしまうはかない存在です。自然というのはこういうことなのですね。

## ミシシッピーアカミミガメ (ミドリガメ)

以前も5月の連休の頃に池に捨てられたことがありました。「池を干す」テレビ番組で、「在来生物を食べる有害な外来生物」としておなじみのカメです。人がいないと畦などで甲羅を干していて、近付くと「ポチャン」と音を立てて池に逃げます。コガメ (ミドリガメ) は小さくてかわい



いのでペット屋さんで気軽に買ってくるけれど、どんどん大きくなります。寿命も20年～40年と長く（カメは万年というくらいだから）、大きくなったカメの水槽の掃除も楽じゃない等々で、家で飼いきれなくなって捨てられたのでしょう。ペットを買うなら死ぬまで飼ってほしいです。

私が見たときは、カメは水の中で口だけ水面に開けてじっとして、口端にオタマジャクシが来るとパクッと口を閉じていましたが、あまり効率のよい食べ方ではなかったです。



## ヘビ

池のなかをスーと泳いでいるのを3回見ました。あっという間にいなくなってしまうので写真がとれません。池の裏のヤブに1m以上もある大きなアオダイショウがいますが、池で泳いでいるのは細くて小さなヘビで（ヒバカリではないかと思う）、オタマジャクシを食べるのでしょうか。オタマジャクシのいなくなった池には来ないかもしれません。もしオタマジャクシがカエルになったら・・・やはりヘビのごちそうになるのでしょうかね。

5月13日、食べ終わったカルガモはどこかへ行ってしまいました。そしてやっぱりザリガニが出てきました。カルガモはザリガニには興味がないようです。

## オタマジャクシがひっそり生きているところがあった

オタマジャクシを見に来た方に「あっちの水たまりにいますよ」と教えていただき、4月17日見に行きました。赤塚公園沖山地区（四葉2丁目）の山際、柴柵の裏側です。クレソンやセリがはえる湿地で、ときどき水がたまっていたりする場所です。このあまり大きくない浅い水たまりになんと大量のオタマジャクシが真っ黒な塊のようになっていました。よく見ると1cm位の小さな生きもの（ユスリカ？ハエかアブの幼虫？）もいっぱいいます。オタマジャクシも餌に困らない？。水質はよいとは言えませんが、絶対カルガモに見つからないし、ザリガニもいません。こういう場所がオタマジャクシの居場所なのですね。

赤塚公園の徳丸が丘緑地地区には、周辺の湧水を利用した池がありますが、水が減っているのかほとんどたまり水に見えます。真っ黒な池の中に、カルガモがいて逆立ちして池底をあさっていました。何かいるのかと思って探してみましたが、オタマジャクシは見当たりません。カルガモも生きていくのがたいへんです。

追記 会員の山田さんがトンボ池の卵を持ち帰り飼育しているそうです。トンボ池が安全な場所ではなく、疎開しなければならぬなんて残念です（坂本 郁子）。

# 活動のお知らせ

運営委員会：5月26日（土）12：30～13：30

6月23日（土）12：30～13：30

作業・観察会の後に報告や活動内容などを相談します（ラーメンしらかば）。

連絡先；坂本（090-4618-1295）

●会報の発送は奇数月。お手伝いできる方はよろしく

日時：7月21日（土）12：30～

活動の問い合わせ等は事務局 瀬田（3969-7124）まで

## 1 赤塚ピオトープ（赤塚トンボ池、バッタ広場）の手入れ

5月26日（土）10：00～11：30 バッタ広場 クズ、外来種の抜き取り

6月23日（土）10：00～11：30 未定

集合はいずれも赤塚トンボ池前（板橋区立美術館そば）（予定を変更する場合があります）

雨天の場合は中止または延期します。連絡先：坂本（090-4618-1295）

## 2 トンボ池・城址・バッタ広場の自然観察会

日時：6月10日（日）10：00～11：30

7月 8日（日）10：00～11：30

集合場所：赤塚トンボ池（板橋区立美術館そば）

持ち物：飲み物、蚊の対策（長袖など）、あれば昆虫網、図鑑、ルーペ、双眼鏡

小雨でも実施します。トンボ池はいつも入れないフェンスの中も観察します。

## 3 日暮台公園樹林地の観察

6月2日（土）、7月7日（土）いずれも10：00～11：30 日暮台公園前集合

（連絡は坂本 090-4618-1295まで）

木が切られて、明るい森になりました。林縁を観察し、自然がどのように変化していくか見ていきます。日暮台公園の「ちょっとだけピオトープ化」ができないかも考えます。

### ●ピオトープボランティア大歓迎

当会は、自然と共存するまちづくりをテーマに、生き物のすめる水辺（赤塚トンボ池）や草地（赤塚公園バッタ広場）などの観察と手入れ作業、自然樹林地の定点調査などを行っています。

作業や観察会で身近な自然を発見するのが楽しいです。

●会員になってくださると板橋の自然情報を中心とした会報「みずみどり」（隔月発行）お送りします（年会費2000円：振込先は表紙に記載）。